

<魔法の手>日頃なに気なく過ごしていますが注意をしていると自然の世界には“不思議”が溢れていることに気づきます。春には決まって草木の芽が膨らむのも不思議、そして花芽から花が咲くまでの劇的な変化も不思議ですね。花ほど目を惹くことは少ないのですが、花から果実への変化もまた魔法の手によるのではないかと思うばかりの驚きがあります。

タブノキは春先に黄緑色の地味な小さな花を咲かせていました。順々に咲き出す花に紛れてついに登場することなく今日までできてしまいました。ここでは丸くて艶々としたタブノキの実を紹介します。腰蓑をまとった姿は花から想像できないような変身ぶりです。これから秋に向けてさらに色も形も変わっていきます。



<タブノキの実>

ナツハゼもかなり前から暗赤色の丸い実を付けています。こちらは花一つひとつが果実に変わっているようで花の名残を感じさせます。ところで、数ミリから1cm程度の丸い果実は小鳥たちに食べられて種が運ばれるようになっているのでしょね。そういえば真冬になるとマンリョウの真っ赤な実はヒヨドリなどの格好の餌になっています。種だけ消化されず糞と一緒に排泄され実生の苗があちこちでいつの間にか育ってきます。



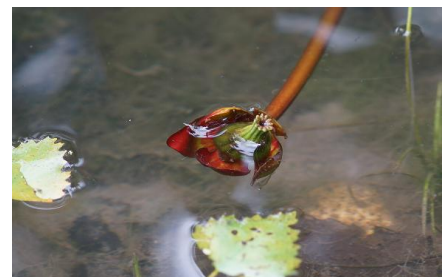
<ナツハゼの実>

<小鳥の口>には合いそうにもないのがウツギの実です。枯れたまま枝先にくっ付いているように見えます。表面はザラツとしてとても固く、お椀の蓋のところに3本ほど棘が付いている5mmほどの実です。小鳥たちに「食べないで!」と言っているような感じがします。



<ウツギの実>

<一寸法師>は昔話ではお椀の船に乗っていますが、ビオトープの池ではコウホネの果実が手のひらに乗った不思議な生き物のような姿で見られます。この実も花からは想像がつきません。横から見ると小魚を入れる魚籠(びく)のようでもあり、やたらに大きな三角頭巾をかぶった小人のようにも見えます。



<コウホネの実>



<ヤマユリの実>

<螻蛄之斧>ヤマユリ (No.11)の花の立派さに因んでこの熟語を使いました。左の写真のヤマユリの実

はまさに螻蛄(とうろう:カマキリ)が斧を天に向かって振りかざしているように見えませんか。(螻蛄之斧) 齊の荘公の故事では、己の力を顧みず斧を振り上げ車に立ち向かうカマキリを“人ならば天下を取

ただろう”と称賛していますが、今では“無謀”、虚勢“といったような意味でつかわれます。(文と写真:松本正勝)